

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 287 回 「赤ひげ」にみる「黒澤と三船」

2008.11.30

少し前の話になるが、秋の夜長を、久しぶりに「黒澤」映画で過ごした。今、NHKBSで、黒澤明監督の全作品を放映している。そのいくつかをDVDで撮りだめし、好きな時間を楽しんでいる。

楽しんでいる...と書いてはみたが、実は小生、あまり黒澤映画、好きではない。

かつて「世界のクロサワ」を評して「小学生並みの価値観」といったのは、かの三島由紀夫だが、三島ファンの小生ゆえ、未だに、この先入観に苛まれている。あまりにも、彼の映画はストレートなのである。理念が勝ちすぎていると言うか、「なにもそこまで愚直に考えなくても...」と思ってしまうところがある。「生きものの記録」などは、そのことが、最も強烈に出してしまった例といえるだろう。

それと、「役者を役者として扱わない」彼の姿勢に違和感を覚える。黒澤映画の役者は、いつの場面も同じである。山崎努、桑野みゆき、東野英治郎、藤原釜足、志村喬、千葉信男、左ト全、そして仲代達也。いわゆる黒澤ファミリーは、常に黒澤らしさを忠実に演じようと必死になっている。黒澤監督作品だから、当然なのであるが、小生、見ていてたまらない思いになる時がある。とりわけ「どん底」や「どですかでん」は、何回チャレンジしても、最後まで見るできないでいる。

この黒澤に対し、唯一わがまを貫いたのが、三船敏郎だと思う。三船の役者としての個性は、その圧倒的な野獣性にある。この三船との個性のぶつかり合いこそが、黒澤明の中に眠っている映像の才能を呼び覚ましたのだ。黒澤映画のスピード感とあの圧倒的な力強さは、三船の持つ、あの独特のキャラクターに負うところが大きい。黒澤は、自分の映像感覚を三船の強烈な個性をもって表現しているのだと思う。黒澤自身、後に自伝で「三船は、それまでの日本映画にはない、類まれな才能だ。ともかくそのスピード感は抜群だ。普通の役者が10フィートで表現するところを、三船は3フィートで表現してしまう。しかも驚くべき繊細さと感覚を持っている。めったに役者に惚れない私も三船には参った。」(黒澤の自伝「蝦蟇(ガマ)の油」より)と書き記しており、1997年12月、三船の死に際して、「三船という役者がいたからこそ、私の映画も成功を治めることができた」と最大級の賛辞を持って褒め称えている。三船という存在は、それほど黒澤という芸術家の想像力を掻きたてる存在だったのである。たとえ黒澤とて、三船という強烈な存在感を持つ役者なしには、これほどの成功を勝ち取る事は、不可能だったと思う。

このコンビが最高に輝いた作品、それが「赤ひげ」(1965年公開)だと思っている。この作品は国内のみならず、海外でも「ヴェネチア国際映画祭サン・ジョルジュ賞」などを受賞。主演の三船敏郎も「ヴェネチア国際映画祭最優秀男優賞」を受賞したが、同時にこれが、黒澤映画における最後の「白黒映画作品」、「三船出演作品」、「泥臭いヒューマニズム作品」となった。

その後の二人の運命は周知の如く、黒澤明は自宅の風呂場で剃刀を用いて手首を切り自殺を図り、「世界のミフネ」も三船プロを旗揚げし、自分なりの映画製作を開始したが、お互い長い低迷期を抜け切れないうまま、世を去ってしまったと思っている。

「黒澤と三船」、二人の天才がその鬼才を十分に発揮できた時、いかなる想像を絶する、圧倒的作品が創造された。しかし、それは常道ではなく、したがって黒澤作品全てではないと思っている。しかもこのコンビが輝いた期間は、そう、永くはなかった事は、いかにも残念でならない。